保育談話會

（秋期に於ける觀察）

十月五日、土曜日の午後、東京女子高等師範學校附屬幼稚園遊戯室に於て、東京地方各幼稚園の方々に御出席を願つて保育談話會を致しました。話題は『秋期における觀察』堀主幹の挨拶に始つて次のように諸氏の御發表がありました。

目白幼稚園　和田　實氏

秋の觀察について、實驗談を話せよとの御註文でして、何か御參考になることをと考へて見ましたが、大した事も考へつきません。只、自分の感じますことを申上げて責をふさぎたいと思ひます。

一體、秋は自然の動物、植物の中で子供のおもちやになるものが多い。夏から秋にかけて一番多いです。植物は實となり、畢りとなる所でありますし、又昆蟲はこの盛りで影を潜めをわる時であります。草木の葉や實はいろ〳〵に變りますので子供のあそびのおもちやの材料が澤山出ます。「觀察」をやかましく考へると六つかしい議論が言はれる樣です。が、私は餘りやかましいものにしたくない。觀察には斯く氣を注けねばならぬと理屈から云へば澤山ありませうが、――殊　理科方面から見れば尙更のことですが――私は成るべくその理屈の方はのけておきたい、そして子供の遊び

の材料には何がなるかを見てゐたい。櫻の葉や紅葉或はバッタが、或はいもむしが蛹に變化する途中、木に上つたり、木から下りたりするのが、何んなに子供の遊びの材料になるかを眺めたい。

こゝで申上げたいのは幼稚園の觀察をやかましく扱つて理論的に、分解したり綜合したりすることは、理科教育方面の人に多いと云ふことです先日、ある師範學校教育學の先生が、觀察の方法は論理學に示してある、幼稚園の觀察を色々と研究する必要はない。論理學にあるぢやないか。物を分解してみ、又、綜合し、歸納するんだといふことで一もなく二もなく片付けてしまつたのにはびつくりしました。幼稚園の遊びを論理學的に扱つたのでは遊びになりません。幼兒教育は誰にでも口が出せる。母親であれば誰にでも多少の意見がある。そんな仕事だから、考へ無しの方が矢鱈にいろんな事を云ふのを一々御尤もと聞いてゐると飛んでもない事になつてしまふ。先の教育學者でさへあの通りです注意せねばなりませぬ。夫れも、子供のあそびとは見てはゐるが、將來は一つの自然理法を教へる所に歸着するのだからといふ積りでやるならば、まだしも差支えないが、幼稚園の觀察は分解して、綜合す可きものときめて扱はれたのでは子供を遊ばせるといふ本體が、何處かに飛んで行つてしまひます。私は、幼稚園の觀察は何處までも子供の見物遊びでなくてはならぬと考へてゐます。

秋はあそぶ材料が澤山あります。實は遊び切れぬ程澤山あるから餘り澤山の材料を入れ過ぎやしないかと思ふ。それで夏と秋は目で觸れる以外に他から取入れることを致しません。非常に澤山ですから、目にふれる丈で十分。これ以上に持ち來る必要がない。成るべく秋は自然に目につく所を取入れて樂しく遊んで滿足して居たいと思ひます私

の園は郊外近くだからかも知れません、市中に比べると自然物が多いわけもありませう。市内の自然物の尠い幼稚園では多少様子も違ひませうが、斯う考へて大したあやまりはなからうと思ひます。

昆蟲のうちでは秋に命を捨てゝ一生を畢るものが多い。「かまきり」も今は旺に出て居りますが夏の青い色が枯葉色に變り、大きなお腹をして最早活動もにぶり死期に近づいて居ります、そのかまきりや、他にバッタやいなご等をいぢくつて遊んで居ります時は、春、夏の様に干渉しないで爲すまゝに任しときます。多くの場合、なすに任せますと殺すことになりますが、その結果は蟲を解剖することになつて、蟲を知つて來ます。或る所までは許されるのぢやないでせうか。何うせどの道捨てる命です。子供の何かの遊びになり、子供の實驗慾、經驗慾を滿足させてやつていゝぢやないかと思ひます。

草木の實、木の葉にも遊びの材料になるものが多いです。どんぐり、栗、草花の種、實、葉の色の變つた物等手工の材料として、舟、草履、首飾り、はりつけになります。青桐の實で、舟を作ります。あの蕚の變化した葉の様な形をした桐の實は舟の形をしてゐますし、その周りについてゐる丸い實は、水に浮べると面白いものです。これ等は十分に子供に持たせて遊ばせることが必要です秋の保育は樂です。材料を心配して集める必要がないだけ十分に持たせられます。それで或る所迄解剖的にいぢくり、ほぐす——六つかしくいへば分解も何等かの益を與へようと思ひます。

この秋は、自然物を以ての遊びの豐富な、子供にとつて幸なときであります。出來ることならば郊外や野原に行き、十分に遊ばせることが必要です。幼稚園としては、一概には云はれませんが、幼兒教育からいへば秋の好天氣に家内に閉ぢ込め

にず野原に放す時であります。

準備もない、とりとめない話ですが、自分の何時も考へる所を、一寸、申上げました。

○

麹町區番町小學校附屬幼稚園　檜山京　氏

只今は秋の觀察に就いて、目白幼稚園の和田先生から有益な御意見を承りましてまことに有難く存じます。私はかつて爲た事又昨日今日爲て居ります一、二の實際をお話して皆様の御批判をいたゞき度いと思ひます。觀察といふ時間を設けるでもなく、必ず爲なければならない觀察事物や事柄を規定する事もない私の幼稚園では、すぎた記錄即ち昨年の保育日誌が唯一の參考なり栞なりでございます。しかし之等は文字通り栞なり參考なりにすぎないのであつて、季節の變化天候等は年毎に同一ではなく又、それに接する幼兒の興味や氣持もそれ〴〵の場合に依て變化し記錄の通りをたどれない場合も多々ございます。

また觀察といふ事が保育時間中の何處ででも行はれ、他のすべての保育項目と切り離す事なしに實行されます時これ丈を拔き出す事はむづかしいので、「秋の觀察」は即ち「秋の保育」といふ事になりはしないかと思ひます。バッタ取り、木の實拾ひ、トンボ取り、紅葉ひろひ、等自然の思惠の豐な秋には、ことに一點の雲なく晴れ渡た朝など、成人の方が家根の下にぢつとしてゐる事が出來なくなります。

成人、「招魂社へ行きませう。」

幼兒、「え行きませう、あ行かう〳〵。」

外へ行くのをいやがる者などは一人もあらう筈がありません。一昨年の九月二十七日出席幼兒九十六人を保姆三人小使一名と保育實習生三人で引卒してまゐりました。出かける前に「招魂社に何が

ある」といふ話から、「お宮がある、大砲がある、池がある、鯉がゐる、バッタもゐる」といふので、「バッタとつて、どうしてつれて來るか」といふ問ひからはじまつて、出かける前に廣告の紙で袋貼りをしました、それをポケットに入れてバスケットを持ち二例にならんで行きます。「二七通り」と云て二と七の日に緣日の立つ通りを行きます、二人づつ並んだ子供達はこの時盛に面白い會話をはじめます。小鳥店の前では一組づゝ立止てしばらく見せてもらひました。成人が「お邪魔しました」と云つたら、店の小母さんが「どういたしまして、遠足ですか、いつてらつしやい」といはれたのでH子さんが「行てまゐります」つて申しました。片側道路工事があつたので、濕た土が深い〳〵穴から堀り出されるのを見ながら行きました。大村さんの銅像のまわりにお辨當をのせて置いて蟲取りをはじめました。バッタよりも草かげの、えんまこほろぎを大分つかまえました、御手洗で手を洗ておまゐりをし池のそばでお辨當にしました。後龜や鯉にふをやつて遊び歸途は裏門から土手に添て園にかへりました。昨年は蟲取の時にはいろ〳〵の催に忙しくて、いてふ拾ひの頃になつて行きました。今年は、九月二十七日に蟲取りのつもりで行きましたがちつとも蟲は見つからず、一匹ゐたがまきりを皆で大さわぎ致しました。

幼兒數が多いのと途中に成人の目が必要なので致し方なく少し遠い時は多勢で出かけますが近所の草地や中六の通り、花屋や市場へ、買物に八、九人で出かけます時、子供同志の會話も、成人も落ちついて仲間入り出來る樣に思ひます。八百屋に玉子を賣てゐる事など子供の方が先に氣がついて話します。染物屋鍛冶屋を見に行く事もあります。

秋の保育はかうして外へ外へと出かけますが、歸てから翌日なり其の日なり、行たところの繪を

畫いたり大きい黑板に合作したり、又知りあひの幼稚園や家へ行　ました時は、お禮狀をかいたりとつて來たこほろぎには毎日枯葉を　めらせてやつたりして、いろいな仕事や製作への緒口が出さます。あと前もなく述べました事に就き皆樣の御批判を伺へれば幸と存じます。

○

本郷區第一幼稚園　石渉つな氏

私の申上げようと思ひますのは、室内で致します觀察。一番先に「こほろぎ」を致しました。組は一番小さくて滿三歳、四歳、中に五歳兒が少しく入つて居ります。花壇からとつたこほろぎを小さい壜に入れて順々に廻しますと、四十八人位の中で「こほろぎ」と云つた子供は十二三人。「これはいとさり」と一人の子は申しました。又一人は「僕斯んなッノの生えた魚を食べた」とこほろぎの觸角をみて申しますので、「ッノの生えた魚つて何でせうね」と皆んなで考へました。「ナマヅでせうか」ときゝますと「左うだ〳〵」と申します。

保姆「どちらが頭ですか」

保姆「こつちに長いおひげがあるでせう」

と云つても頭の方角はなか〳〵に分りません。

保姆「お目々はどうちにあるでせうか」

と申しますと「こつち」と五歳の子供が指しました。丁度よく鳴いてゐたのを見て「お翅をこうして鳴くのね」と眞似しましたが、大抵の子供は「こほろぎが喧嘩してる」喧嘩々々と許り、ほかの何事にも氣を注けません。

次にバッタ、イナゴを飼育壜に入れて机上に置きました。これは大概の子供はよく知つて居ります。

保姆「バッタとイナゴはドコが違ふか」

を尋ねますと、「バッタは綠色、イナゴのセナは黑

い。」「バッタの頭は尖つてゐる。」「夏休みに〇〇へ行つた」などゝ夏の話、海の話に飛び込んでしまひます。

イナゴが壜に捕つてゐるのを見て「先生、イナゴはつかまつてゐるけれども、バッタは何うしてのぼつて來ないの？」と一人の子供が質問しました。組でもいゝ子でした。

保姆「イナゴの方は脚がザラ〳〵してゐるでせう。バッタの方は少ししかザラ〳〵してゐないから」

この春、お玉杓子をずつと飼育致しました。その時にお玉杓子から成つた蛙が壜の中を登るので、蛙には吸ひつく所があることを説明してやりましたそれで、イナゴが同じ様に壜を登るのを見て大きい組になると、直ぐ先の蛙を思ひ出して分りますが、小さい組では喧嘩にばかり氣を取られてゐます。

保姆「何を食べて生きてるでせう」

お米とか。クリームとか自分達と同じいものをしきりに申して居りました。

植物の方では「栗」を、ちよつと、致しました。栗を見せますと「それおいしいですか、甘いですか」とそんな事許り申します。

「稻」も、机に少し宛配りまして「キンダーブック」の繪で致しました。汽車の頁になりますと、イネはそこ除けで、汽車の話やら、僕大きくなつたら兵隊さんだとかそんな話で持ち切り、本のをわりの方の「米で出來るもの」の頁になりますと、ごちそうの話許りで大騒ぎです。

小さい組では或一つの物を落付いて觀察すると言ふ事はなかなか困難で思つて居る事はそれからそれへと保姆が豫期して居ない處へ飛んで行きますし動的の物即ち動物の方が靜的の植物より興味が深い様に思はれます。

〇

武藏野高等女學校
附屬幼稚園　森　とよ氏

私の幼稚園に於きましては幼兒の自發的質問を利用しまして何事も幼兒本位にいたして居ますが其のためか時折り私共の思ひ付かぬ面白い出來事が展開され其都度愉快な內に知能の啓發や健康增進も出來るのであります。かゝる場面に出逢う度毎に私共の責任の如何に重大なるかを深く感じられまして一層保育事業の研究に發奮させられます

さて天高肥馬の秋、幼兒を戶外で紫外線にふれさせよ日光浴させよと申まして我園では出來得る限り戶外保育を奬勵して居ります。

恰度九月中旬の或一日の觀察の一端を申上ます私が朝園に參るより早く「先生御はやう」と元氣のよい園兒が直ぐ校庭で蜻蛉の飛んでゐるのを見付けて「先生蜻蛉捕りに行ませう。」「さうですね」と考へてゐる內一匹見つけ籠を持つて夢中でかけまわつてゐました。

又間もなく「先生連れてつて下さい」と再三再四の願故「參りませうか」と承知するが早いか其幼兒は全部ふれ廻つた。園兒一同大贊成一人も殘らず庭に集り出發の時をおそしと先生を待つてゐました。

先生「まあよく御揃になりました事」五、六人と思つたら皆さん御出になりますの」

幼兒「ええ僕も、私も連れてつて頂戴」と、嬉々としてよろこぶ。

やがて一同園舍を後にして出發しました。

「御手てつないで」を歌ふ者、あゝうれしい〳〵とスキップしながら飛び步く者さながら遠足氣分で御座いました。

路傍の人は此樂しさうなピクニックを微笑して見送つて下さる。太陽は午前のやわらかな光を我々の幼き者一行の爲に照して下さる。間もなく碧

々と草の繁つた野原へと着きました。勿論發起人の幼兒を先頭として。

「茲だ茲だ」と蜘蛛の巣をちらしたやうに四方へ散らかりましたが危險なもの一つないのでそのまゝ樣子を伺つてゐました。

長い間の雨もやつと上つたので彼方、此方に水溜が有のを見付けたA幼兒「海だ、海だ」

B幼兒「こんな小さな海があるか　川だ、川だ」

C幼兒「ちがふよ、これは水溜りだよ」と言つて水溜と解決し其流れが何處へ行くかと互に流れの方へと注目してゐました。

突然の事とてもち桿一本網一つ持て來ませんが機轉のきく幼兒は早くも帽子やハンケチを網の代用と致したのを見次から次へと眞似て行きました

無數の蜻蛉は空の王者のやうに又小さな飛行機の樣に高く低く飛び廻り容易につかまりません。衆兒は戰場にて敵の飛行機をたゝき落すといふ程

の勢力さながら地に足も付かぬ程の有樣です。

行き交ふ人々も此有樣を立止つて微笑して行きます而しさしもの幼兒も三十分位でぽつり〳〵と私の側へやつて來るどうしても捕れぬ者とあきた幼兒とで約三分の一程は鬼ごつこやら徒競爭で無中です。草花を手折る者もあります、其内の一人遠くに見える異樣な建物に注意し

A幼兒「あれなあに」

先生「さあ何でせう」

B幼兒「先生僕知つてるよあれは中央市場よ、元はよくはやつたが外の市場と競爭してまけちやつたのそれで止めたの」

先生「まあさうですか、よく御存じね」

C幼兒「勝つた方の市場ははやるよ、時々樂隊をして大賣出ししてるよ、今は西瓜の大賣出し」

先生「さうですか。では御勞れでせう御喉が乾いたでせうから其勝つた市場へ西瓜買に參りませう

か」

大賛成やがて二十餘人の子供を連れて幼兒に手をひかれ市場へ參りました。

この不意の珍客の一隊を市場では物珍じさうに注意して居ました。先生と八百屋との問答を幼兒は注意深く聽いてゐました。大きな美味しさうなのを三箇求めたのを見、僕が持つて行く私が持つて行くで大騒ぎ。變る〳〵御願する事として歸途につきました。互に持合つてゐる内一人の幼兒があやまつて落してしまひました。

幼兒一同「落しちやつたの先生、甘いお汁がこぼれるぽた〳〵と」と大さわぎでした。

先生「重かつたでせうでは先生が持つて參りませう」と申しましたら皆々安心、落した子供もホッとした態、間もなく園に到着。

蜻蛉捕りの一隊も歸つてゐましたか、五、六人の幼兒尚庭にあつて勞れも知らず一生懸命に蜻蛉追ひ、一人の幼兒洗面器に水を入れ彼方此方に水溜をこしらへそこへ蜻蛉の下りて來る隙をねらつてゐます。

私は其思つきに驚き、かくまで觀察が出來てゐるかと思つて感慨無量。

其内一幼兒「こんなに澤山捕りました」と持つて參りました數々の蜻蛉。

幼兒「これは、シホカラ、これは、アカシ、これは、ギン」

先生「まあよく御存じね、その外蜻蛉の名を御存じですか」

幼兒「知つてます。鬼ヤンマ、トホスミ蜻蛉、オハグロ蜻蛉」と答へた。

夢中で矢鱈に捕つてゐるのではなくよく判つてゐるのに少からず私の心に何物かゞひゞきました蜻蛉科、ヤンマ科、イト蜻蛉科、と學問的に動物學上別れて居ますが子供は其ほとんどの種類を知

つてゐましたが、川とんぼだけは捕れませんので殘念でした。
先生「では皆さんは御飯やパンを召し上りますが蜻蛉は何を食べますか」
幼兒「蚊や蠅」
先生「大きな、ギンヤンマ、鬼ヤンマ、は小さな蝶や蛾も食べながらすい〳〵と飛んでゐますよ」と申しますとあの蝶をと驚きの樣子でした。
先生「夜はどこに休みますか」
幼兒「木の葉のかげや草の葉のかげ」茲で蜻蛉の住所の不定でない事を知らす。
其證據に夕方住家をさがし又次の夕方同所に見出す事が出來るとしらせました。
先生「そんなに捕つたら蜻蛉はゐなくなりますね」
幼兒「いいえ卵を產みますからいゝんです」
先生「卵はどこへ產みますか」

幼兒「水溜りやお池」
先生「先程庭で水溜をこしらへて居つたのは何のためですか」
幼兒「お池を造つて卵を產ませるの。その內に捕るのです」とかく答へた幼兒は五十人中約三分の一御座いました。其後蜻蛉を硝子器に入れ蠅や蚊を食べる有樣を觀察させました。不思議さうにぢつと見入つてゐました。
其內一人の幼兒に西瓜を催促されたのでテーブルの上に俎と庖丁を持出し切り初めました。幼兒はたゞず口をならして嬉んでゐます。
さて之を食事用の盆にくばり「皆さん召し上る前に先生の言ふ事を御聞き下さい」「塗繪の西瓜をその西瓜の樣に美しく塗りませう」と申しますと一同またゝく間に色採種子等保姆の何等の干涉もなく美事に塗れました。塗つてゐる間に上の美味しい所を失敬する子もありました。最後に保姆も

幼兒も共に美味しく充分に一入の味覺の觀察も出來ました。

以上は一日の觀察事項の概要であります。之によつて私は無言のまゝで而も幼兒の自發的行動を傍觀し日頃の觀察が如何なる點まで進んでゐるか知りました。又言葉の表現卽ち會話によつてより一層の觀察が出來ました。

フレーベル先生の言に「幼兒は保姆の先生なり」と。誠に心に銘じそれをモットーとして日々の保育に研究努力せねばならぬと思ひます。そして此一事によつても自然に還れ自然に親しめと云ふ事を非常に深く感じ如何に此大自然によつて敎化せらるゝかを知られます。

貴重なる時間を御分ち頂きましたにも拘らずつまらぬ題材を申上げまして皆樣の御靜聽を戴きました事は私の深く感謝に堪えない處で御座いますどうぞ皆樣の御盡力によつて時々本日の如き有益な御催しを御開き下され互の御研究を御聞かせ下さる機會の多からん事を衷心より御願申す次第で御座います。

○

九月の豫定主材目に就いての實際

東京市富士見尋常小學校附屬幼稚園　小杉さと氏

暑さ寒さも彼岸までと申しまして、九月は誠に快き時候でございますが、私は別に觀察いたしたなどゝ申上げるほどの事はございませんが、只九月の實際に生活した事を一寸申上げて見度いと思ひます。

九月の一日は靜かな二百十日でありまして、此日は大震火災の七年紀念日でありましたが、日曜日で其翌日の二日が幼稚園の始業式なので園兒一

同遊戯室へ集り、津田校長先生をお迎へしてお休み中のお話を極く簡單に話されまして式は終りました。それからは毎日毎日園兒の交り交り旅行話が出ます。園兒のお土産には貝や石や海綿の植木鉢など貰ひました。保姆も亦、日光旅行中の繪葉書など持ち參り掲示板にかゝげ其他珍らしき物は陳列棚にならべて皆々樂しんで見ました。此の月の五日頃からは、雨ばかり降りつゞきましたので皆で交り〳〵兎や雞や又色々の小鳥などに餌をやり、親鳩、子鳩を世話したり、セキセイの親鳥、小鳥など覗いたりして歡んで遊びました。又十一日は大雨大風でありました。丁度此の日は二百二十日なので簡單に田舍の農業のお話いたしました。十三日は乃木神社祭なので前日から乃木大將の繪葉書を掲示板に掲げたり又大將の御幼少の時の逸話や御來歷の著しきお話などいたし、十三日は午前十時頃から松竹梅の三組一同遊就館に參り、お寫直や御遺物を拜見して、いろ〳〵お話いたしました。十五日は氏神築土神社のお祭りなので前日から萬燈と申して、いはゆる田樂提灯の準備をして繪を畫いたり、手工細工をしたりして皆々園兒のお土産にいたしました。

それから十七日はお月見なので前日から花壇の手入れをいたし、薄や萩や紫苑や雞頭などを花瓶にさし、枝栗や枝柿や、ほうづきなどをとつて籠に盛り、お月樣に供へ、粘土細工の準備をして藤棚の下に机を並べて皆々園兒が歡んで、おだんごや果物をこしらへ、又中には兎や象などをこしらへて供へた園兒もありまして、大笑ひをいたしました。津田校長も來られて一緒に唱歌を歌ひ、遊戯をいたし、お話などして、園兒の歸りには、めいめいで造つた、おだんごやくだものや、ほうづきなどを頂いて其の晩のお月樣にと持ちかへりました。

それから嵐後の藤棚の刈込み手入をいたしましたので藤の蔓や葉が澤山ありますから毎日〳〵藤棚の下で葉を拂ひ莖をとり、龜の子や籠や、お舟や飛行機、藤の葉草履の形など造つて遊びました。毎年〳〵きまつた篤志家から枝栗と蠶蛹を澤山に頂きます。今年も二十四日に蠶蛹を洗面鉢に一ぱい頂きましたので、皆々園兒が大喜びで庭の築山や花壇の草の中へ放ちましたので、園兒の頭でも胸でも又手足のきらひなく飛びつきますのでお辨當の時間も忘れて遊びました。又折々日和のよき日は靖國神社へ參つて、かやの實やどんぐりや、落葉など拾つて、秋の氣分を養ひました。

之が九月中の生活狀態でありました。誠にとりとめのないお話いたしまして、お耳を汚しました尙又園兒が造りました物の、龜の子や藤の葉草履飛行機や、萬燈など持參いたし御笑覽に供へます。

○

大和郷幼稚園　坂内ミツ氏

理屈はいひ易く實際の話は誠に話しにくいものでありますが、今日の話題が幸にも觀察の實際についてといふのでございますから實際のお話を承る事が出來ると喜んで出席いたしました。

果せる哉數々の有益な御話を承りましたこれからいろいろの御話を伺う事と喜んで居ります。私は久しく引つ込んで居りましたが再び奉職いたしました。もう頭もなくなつて居りますので、時勢におくれはせぬかと心配して居ります。今日のやうに多數の方がお集りの處ですから實際して居ります事を御話して御批評を願ひ度いと存じこゝに立ちましたわけでございます。

私の園は本年四月の開園で秋の經驗は漸く今日迄の處であります。その上市の内にありますので自然物に乏しく苦心して居ります。理想から申せ

ば市中の子供には時々郊外に連れて行き田畑の様子を知らせ、苅入れの有様も見せ度い、いもも掘らせ度い、大根もぬかせ度い、時には森の中に連れていつて小鳥の聲にきゝとれたり、つかれる迄蟲も追はせ度いと思ひますが其處まで連れて行く事が容易の事ではありません、郊外におありになる幼稚園が羨しいと思ひます。それでも出來ない事をいくら考へても仕方がありません。自分の園の環境と與へられた設備に於て最善をつくすより外はないと思ひます。幼稚園令施行規則第二條に保育項目は遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等とすとあります。これ等の項目を如何にとり入れ如何に取扱ふかについては研究を要すべきものと思ひますが、觀察に對しては僭越ながら自分では次のやうに解釋して居ります。即ち幼兒の時から事物に注意する習慣を養うためと他日學習する時興味を持たせる爲めで其物について知識を與へるといふのではなく一つの潜勢力を得させる事である保姆は特に其點に注意せよとの爲めに觀察といふ項目が加へられたのだと思つて居ります。

保育は保育室だけで行はれるものではなく、門を入つたら保育がはじまり門を出る迄は一寸のひまも心の弛みもない筈でありますから保育室で改めて只々觀察といふて致すべきものでなく事にあたり物に應じ常に觀察させるべきだとぞんじますそれには保姆自身が常に物事に注意し興味を持つて居らねばなりません。自分が興味を持たず幼兒にだけ强いる事は無理な話であります。

九月十三日でした。十日近くも降り續いた天候が漸く晴れて十時頃には太陽が照り出しました。子供心にもどんなにうれしかつたのか、お日様が出たと叫び出しました。外に出てお日様を拜みませうといふので外に出て天を仰ぎました。澄みました青空の處々に綿をちぎつた様な白雲が浮んで

居りました。其雲足の早い事かけ足で南の方に走つて行きます。雲が歩く雲が駈けて行くとて大喜びて見て居ります。殆んど總ての子供の顏は暫くの間天を見つめて居りました。其間には雲はどこに行くの、雲はあんなに早く走つていつておしまいにどうなるのかといろ〳〵奇問を發して先生を困らせるのもあります。空の色はきれいねと感心して居るのもあります。實際澄みきつたきれいな色でした。其内にお花が倒れそうになつたとて花壇にかけて行く人もあれば、蝶を追ひまはす人もあり、連日の降雨について話しあつてる幼兒もありました。又或時は蟲が鳴くと一人がいひ出すと其まはりに居つた子供は一齊にかけて行き、花壇のまはりを探します。一匹でも見つけると大喜びで飼つてくれと持つて來ます。草むらがあつたらどんなにかよいでせうと思ひます。夏休み中もわざと草をとらずに置きましたのに塀のそばに少しばかり生えたばかりですがそれがずい分役に立つて居ります。

こんなにして毎日のやうに蟲を追ひ蝶を追ひとんぼを取つて居りますが、殊更に足が何本翅が何枚と數へる事はさせません。興味を以てきく人には答へますがそれは教へるとは思ひません。興味を增させる爲めです。時によつてはわざ〳〵草の名をいつたり、蟲の名をいつたりしますのがそれは自然物に親しみを感じさせる爲と興味をそゝる爲めであります。保育の内容を知らぬ人は二樣の非難をします。或人は幼稚園は教へ過ぎる、子供の内にあんなに注入しては過重だといひ、或一方の人は幼稚園にやつても何も教はらぬといひます兩者共に當を得ないのです。興味を起させる爲めに他日の潛勢力となる爲めにと思つて行つた事を教へ込むのだと解釋する人は過重だとあります。數の觀念にしても、自然物や自然界の現象を觀察

させるにしても、遊んでる間に致しますのでそれ等を見出し得ないで保姆はたゞ何の考へもなし遊び暮して居るものだと解釋される方は何も敎へぬと非難されます。

しかし私共はこの非難に對して說明を與へるにはそれだけの自信があり、それだけの實行がなければなりません。一分間も頭に休む間がないのであります。以上のやうにして觀察させる事は頭の用ひ方一つで出來ない事ではありませんが、一番困難と思うのは平等に行き渡るといふ事であります。先生の側にばかり居る子供には厚くはなれて居る子供には薄くなりはせぬかと案じられます。その點についてよき御考へを御持ちの方に承り度いとぞんじます。

實際と申しながらやつぱり理屈に走つてまいりましたから一日の實際を簡單に申上げます。九月二十七日(金)の一日です。

只々幼兒の在籍七十足らず出席六十二三名職員三人、三組に分ち三年保育の組が十二名居ります八時半より十一時半迄です。

子供は八時前より來る人もあれば九時近くにならねば來ぬ人もありますので、九時に全體あつまり國旗をあげ日の丸の旗をうたひます。つゞいて一同で遊戯をしました。はじめ一の組、二三の組が後で少しして各室にはいりました。十時頃飛行機が飛びました。大方の子供が見ました。それを見送つてから空がきれい雲が多い、此間のやうに歩かないと暫く天を仰いで居ました。十時半頃私は庭の石を拾つて居ました。其まはりに七八人の子供が集つて石を拾つてかごに入れ力一つぱい出して運んだり赤い石がある貝のがある丸いとがつて居るこんな大きいのがある、それは小さいとしきりに手傳つて居ます。其間に花壇のまはりにカンナの花べんの散つたのを拾つて居る子供は時々持

つて來て私に見せたり、蝶が居るとて引つぱりに來たりして居ました。砂場にも五六人滑台にも少數見えましたが至つて靜かです。外の先生はと見ると今日は常になく室内が賑かで二の組は積木に夢中で半數位入つて先生を中心に共同して積んで居ます。三の組の先生は此頃入園した人に氣を配りながら粘土をさせて居られます。そこに一の組が四五人二の組が二人お客樣に來て熱心につくつて居ます。三の組もつれ込まれて動きません。一の組の室には昨日のきり紙が足らなかつたと見え二の組の人もまじり五六人がしきりにきり紙をして居ます。

十一時頃室内の仕事は終つたと見え殆んど全部駈け出して居ます。二つ三つの組には分れて居ますが今までの靜けさに引かへ大さはぎです。こん氣よく先生も逃げたり追つかけたり疲れてしまはれるやうです。

惜しいやうでしたが迎の人も多くなりましたので二十分にお旗のまはりにあつまり旗をおろして其邊を片づけさせ各室にて仕度を整へてかへりました。

桐一葉

一茶

桐一葉二は三は四葉せはしなや

けさ程やこそりと落ちてある一葉